

「道心坂の怪」

本成寺村大字月岡の山から下田の郷へ下る崖道。有名な道心清水の湧いているところ。もとは樹深い坂道だったといふ、樵夫が旅の尼僧（あまさ）を見て殺した。その亡念があらわれるといふ、殊に雨のふる夜だと。

（注）ここで注目したいのは、かつてこの地に「道心清水」という有名な清水が湧いていたということです。

この伝承民話で伝えられている出来事は、「崖道」「道心清水」「坂道」などとあることから、道心者の常閑さんが道を切り拓いた後のことだったのかもしれませんが。

また、「旅の尼僧」と書かれています。旅の途中ここを通った尼僧と解釈するのか、「旅の」という言葉が今でも使う「地元でない、よそから来た」という意味を表すものか不明ですが、普通の解釈の流れからするとこの伝承では、よそ者の尼僧が樵夫に殺された、その清水の湧いている場所が有名な「道心清水」だった、ということなのでしょう。

ここで述べられている清水がどこにあったのかはわかりませんが、ノジコの会前会長の故関根依智朗さんは、「月岡集落側の林道の登り口に、マサキの生垣があり、そこから一寸上ると平坦な土地がある。ここが伝えられている尼寺のあったところではないかと思われる。尼寺の近くに湧水の池が存在した。その池も田川隧道の掘削によって涸れてしまったという」と推測し、聞き語りを伝えています（『道心坂オオヤマザクラ並木保全活動十周年記念誌／ノジコの会編』）。

また、かつて道心坂の発展に力を注いだ地元月岡の故西村日子三郎さんは、自ら作詞した『道心坂小唄』のなかに「比丘尼（びくに）の池」の地名を盛り込み、「比丘尼池も道路改良でなくなったし、若い人は名前も知らないでしょう」と語っています（平成4年6月21日付け三條新聞）。

ちなみに「比丘尼」とは広辞苑によれば「①出家して具足戒を受けた女子。尼僧、あま②鎌倉・室町時代以降、尼の姿をして諸方を遊行した一種の芸人。（略）江戸時代には尼の姿で売色した私娼をもいう」としています。

道心清水が湧いていたところが比丘尼の池だったのか、尼寺があってそこで暮らしていた尼さんなのか、それとも尼さんの姿をしていた芸人や娼婦だったのか、今となっては想像をめぐらすしかありませんが、いずれにしても興味のつきない伝承民話であることには間違いありません。